

奈良文化財研究所本庁舎建て替えに伴う発掘調査—平城第 530 次—

独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所 都城発掘調査部

調査地：奈良市二条町2-9-1

調査主体：奈良文化財研究所 都城発掘調査部

調査面積：約 1,700 m²

調査期間：2014年4月16日～継続中

奈良文化財研究所は本庁舎建て替え事業をおこなっており、現在は敷地の南部を対象として発掘調査を進めています。今回の調査では、平城京造営時に埋め立てられた旧秋篠川を検出しました。また、埋め立てに際して、古代の土木技術である「敷葉工法」を施していたことが明らかになりました。

※今回の調査では現地説明会はおこないません。

1. はじめに

奈良文化財研究所は、現在本庁舎建替事業を進めています。2014年2月より旧庁舎の解体工事を始めており、これと併行して4月14日から新庁舎建設予定地を中心とする発掘調査を開始しました。発掘調査は、上部構造の解体が終了した場所から基礎の撤去にあわせて実施しており、現在は旧本庁舎南棟部分と旧研修棟をあわせた敷地の南部を対象として、調査を進めています。

奈良文化財研究所の敷地は、平城京跡右京一条二坊四坪・二条二坊一坪、西一坊大路・一条南大路にあたり、今回の調査区は一条南大路と右京二条二坊一坪にあたります。周辺の調査や、事前におこなわれた試掘調査では、秋篠川の旧流路に由来するとみられる中世までの遺物を含む沼状の堆積が広がっており、奈良時代の遺構はほとんど残存しない可能性が高いと考えられていました。

2. 調査の成果

(1) 基本層序

調査区は地山が残る南側が高く、旧流路が位置する北に向かって低くなっています。層序は調査区北側と西南部、東南部で若干異なっています。調査区北部では、地表から旧本庁舎建物に伴う造成土(厚さ約2m)、旧耕土・床土(約20cm)、中世の遺物包含層(20~30cm)、灰色砂層(約20cm)が堆積し、その下に黒色土層(最大約1.2m)が堆積します。調査区西南部では、旧本庁舎建物に伴う造成土(約2m)、旧耕土・床土(約20cm)、中世の遺物包含層(20~30cm)が堆積し、標高67.8~68.1mで地山に達します。調査区東南部の旧研修棟部分では、建物に伴う造成土(約1.5m)、旧耕土・床土(約30cm)、中世の遺物包含層(30cm)、奈良時代の整地土(約20cm)で、標高67.9mで地山に達します。

遺構検出は、調査区北側では黒色土上面、調査区南側では、地山および奈良時代の整地土上面でおこなわれました。遺構検出面の標高は67.3~67.9mです。

(2) 検出した遺構 (図1)

流路1 調査区中央から北部にかけて、北西～南東方向に流れる流路です。北肩は現調査区外北方にあり、幅約28m以上で、長さ約55m分を検出しました。流路の堆積は複数時期にわたり、土層観察によると、遺物を多く含む堆積と流水の痕跡を示す堆積が交互にみられ、徐々に北へ位置を移していることが明らかになりました。その方向や規模、調査地の東南方に残る遺存地割から、流路1は秋篠川の旧流路であったと考えられます。

流路2 調査区西南部で検出した流路。幅0.8～1.5mで灰色粗砂が堆積しています。時期は不明です。

黒色土層 (造成土) 流路1には最大厚さ1.2mの黒色粘質土が堆積しています。この黒色土層は、緑灰色粘土ブロックを含み、厚さ5～15cmの単位で積み重ねられています。黒色土層からは古墳時代の土器が多く出土しましたが、7世紀末から8世紀初頭の土器の破片や瓦片も少量含まれています。このことから、黒色土層は平城京造営時に流路1を埋め立てた際の造成土と考えられます。また、黒色土層の底面では枝葉を束ねて敷き並べていました。枝葉は南北20m×東西14mの範囲に広がることを確認しており、調査区西側や東側にも広がっているとみられます。樹種同定によるとこれまでのところ、二葉マツ類やアカガシ垂属などが含まれていることがわかっています。

灰色砂層 (洪水砂) 調査区北側を中心に堆積する灰色砂層は中世以前の秋篠川の氾濫に伴う洪水砂と考えられます。現存の厚さは10～20cmで、その堆積範囲はほぼ旧流路の範囲にあたります。この洪水砂により、本来あった奈良時代の遺構面は大きく削られたものと考えられます。

大土坑 調査区東南(二条二坊一坪の東北隅)で検出した東西約6m×南北約5m、深さ約60cmの土坑です。旧流路を黒色土層で埋めた後に掘り込んでいます。この土坑を黒色粘土で埋めた後に周辺の整地をおこなっています。埋土から奈良時代前半の土器や瓦などとともに、木簡(播磨国の庸米の荷札)が1点出土しました。

東西溝1 調査区中央東側で検出した東西溝です。幅約1.8m、深さ約50cm、長さ約13m分を検出しました。埋土は、溝機能時の流水痕跡を示す灰色砂層と埋め立て時の灰色粘土層に分かれます。この溝は一条南大路の南側溝推定位置にあたりますが、調査区西側へと続かず、後述の南北溝1と接続しL字状を呈することから、条坊側溝ではなく、後に同じ位置に掘り直された溝と考えられます。

南北溝1 調査区中央で検出した南北溝です。東西溝1に接続します。幅約1.5m、深さ約50cm、長さ約20m分を検出しました。埋土は、灰色粘土層と砂層に分かれます。

掘立柱列 調査区東南で検出した南北方向の柱穴列です。柱間寸法は約2mで3間分を検出しました。時期は不明です。

この他、調査区南側では地山上で中世の耕作に伴う細い溝や小穴を検出しました。また、調査区東南部では一部奈良時代の整地土が残っていましたが、顕著な遺構はみられませんでした。

(3) 出土遺物

調査区からは土器・瓦・木片・植物遺体が出土おり、また木簡も1点見つかっています。土器は、弥生時代から古墳時代の土器が流路から出土し、奈良時代の土器は調査区東南の整地土や大土坑から、中世の瓦器や土師器は耕作溝や包含層から出土しています。瓦は、包含層や整地土から出土。軒瓦は少なく、丸・平瓦片が中心です。

(4) 秋篠川の旧流路の埋め立てと敷葉工法について

今回の調査で検出した流路1は平城京造営以前の秋篠川旧流路であると考えられます。流路1は黒色土により埋め立てられていましたが、黒色土層から出土する遺物の中に7世紀末から8世紀初頭の土器の破片や瓦片が少量含まれていました。このことから、秋篠川は平城京の造営にあたりほぼ現在の位置に付け替えられ、その旧流路が埋め立てられたものと考えられます。

和銅3年(710)に平城京へ遷都するにあたり、自然河川を付け替えるなどの大規模な造営工事がおこなわれました。現在の秋篠川は、条坊に沿ってほぼ北から南へと流れていますが、これは河川を条坊に合わせて付け替えたため、西市への物資の運搬などに使われていたと考えられています。秋篠川の旧流路は、遺存地割や地名の分析から研究所敷地の北西方から平城宮跡西南隅を通り、南東方向へ流れていたと考えられてきました(図2・3)。今回の発掘調査により、従来の想定通り平城京の造営にあたって秋篠川旧流路が埋め立てられていたことが遺構・遺物の両面から確かめられました。

また、黒色土層の底面で検出した枝葉は、人為的に敷かれたものと考えられ、これは古代の土木技術の一つである「敷葉(敷粗朶)工法」とみられます。敷葉工法は、土中に草本・樹皮・粗朶(木の枝)などを敷いて地盤や盛土を補強する工法で、中国・韓国に類例があり、日本では弥生時代の原の辻遺跡(長崎県)や上東遺跡(岡山県)にみられるものが古い事例で、古代では狭山池(大阪府)の堤や山田道(奈良県)、水城(福岡県)の盛土底部に施されたものが知られています(図4・5)。

調査地は、平城宮の西面中門である佐伯門の正面で一条南大路が通る場所にあたります。宮門の前面にあった秋篠川の旧流路を埋め立てて大路を造成するにあたって、軟弱地盤上での盛土の基礎を補強する目的で、この工法が用いられたと考えられます。

3. まとめ

新庁舎建設予定地の奈良時代の遺構面は中世以前の秋篠川の氾濫で大きく削平され、失われていましたが、平城京の造営に関する新たな知見を与えることができました。

① 平城京造営時に付け替えられた秋篠川旧流路を検出しました。

平城京造営以前の秋篠川は研究所敷地内を北西から南東方向に流れていました。この旧流路の埋め立て土に7世紀末から8世紀初頭の土器や瓦片が含まれていたことから、旧流路は平城京造営時に埋め立て、造成されていたことが明らかになりました。

② 秋篠川旧流路を埋め立てる際に「敷葉工法」を施していました。

樹木の枝を敷き並べる敷葉工法は古代の土木技術の一つで、発掘時には奈良時代の緑色を保った状態の葉も出土しました。秋篠川旧流路を埋めて一条南大路一帯を造成する際に、軟弱地盤上に施工する盛土を補強・安定させる目的でこの工法が採用されていました。これは、平城京造営にともなう土木工事の実態を知ることのできる重要な調査成果です。

問い合わせ先：奈良文化財研究所 副所長

小野 健吉

0742-30-6832



図2 調査地と周辺の遺存地割
(榎考研2011『平城京三条大路II』に加筆)



図3 平城宮建設以前の地形
(奈文研(編)2012『まほらま』に加筆)



図4 山田道の敷葉工法(『奈文研紀要2008』)



水城の敷葉工法(復元図)

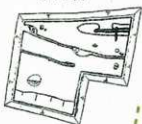


山田道の敷葉土層 / 7世紀

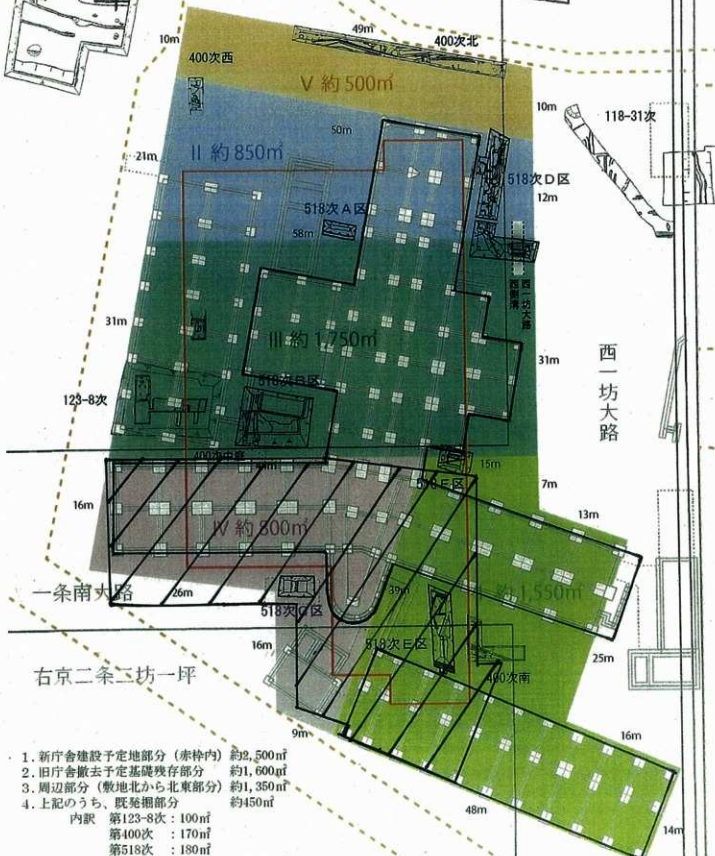
図5 敷葉工法の類例
(狭山池博物館2002『常設展示案内』)

右京一条二坊四坪

215-2次



248-12次



西一坊大路

一条南大路

右京二条二坊一坪

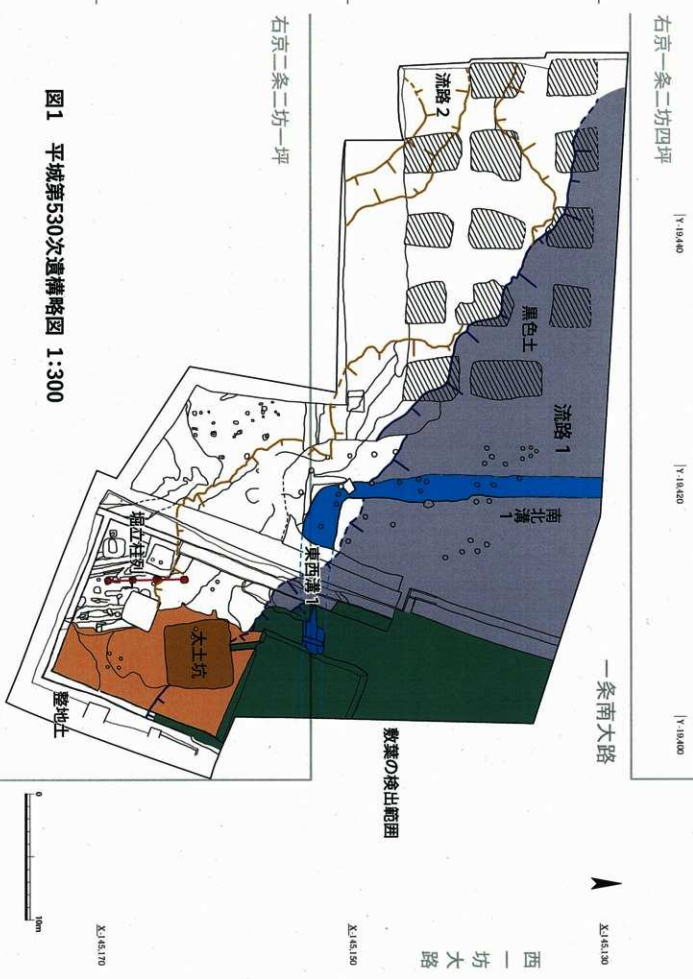
1. 新庁舎建設予定地部分 (赤枠内) 約2,500㎡
 2. 旧庁舎撤去予定基礎残存部分 約1,600㎡
 3. 周辺部分 (敷地北から北東部分) 約1,350㎡
 4. 上記のうち、既発掘部分 約450㎡
- 内訳 第123-8次: 100㎡
 第400次: 170㎡
 第518次: 180㎡

新規発掘予定総面積 約5,000㎡

発掘調査予定地概念図 (距離は概計)

平城宮

佐伯門



右京二条二坊一坪

图1 平城第530次遺構略图 1:300